

北部地域 療育センターだより

第10号

第13回 北部地域療育センター療育講演会

センター開所以来毎年開催してきた今枝所長による関係機関対象の講演会を、上記名称に改めました。
今年度講演内容をご報告いたします。

❖ ❖ 「学齢期の子どもたちのフォローアップから見た幼児期」 ❖ ❖

今枝 正行(小児科医) 平成 27年 11月 11日

療育センターの幼児期初診は親御さんからの相談のかたちでスタートします。それは就学後、親御さんの代弁の助けを受けながら、子ども本人が主体となり思いを語り出してくれることも増えてきます。近年、子ども全体の少なくとも10%に何らかの発達障害の特性がある、と考えられるようになってきています。～子どもたちが将来、自分らしく、たくましく生きていくために、幼児期の発達の土台づくりにどんな視点での応援が必要なのか～本講演では学齢期の診療から学んでいることをみなさんにお伝えしたいと思います。(以下、講演内容を要約・加筆し掲載します。なお事例は個人を特定できない記載内容としています)

1 学齢期再初診・三者(本人・家族、学校、療育センター)懇談

事例) 小学6年生。母親と5年ぶりの来診。相談内容は「友だちや先生に嘘つきととがめられ、登校が辛い」というもの。相談を受け学校に出向き、本人と母親、学校、療育センター三者で懇談をした。その中で本人が「僕は「なぜ?」と聞かれても大抵答えることはできない。そんな状況で困っているときに相手に「えっ?」と聞き返されると、言ったことが間違っていて怒られると思ってしまい反射的に逆のことを言ってしまう。すると「嘘をついた」とさらに怒られる～ と辛い思いを語った。療育センターは幼児期発達経過と家庭の努力を知っている立場で参加。成長の中で自閉症のコミュニケーション障害の特性の現われが微妙になり、理解されにくくなっている現状を三者で共有できた。そして学校での書き文字でのコミュニケーションも取り入れたサポートが始まった。

2 自己開示の力を育む

前記事例では、本人が母親に学校のことを報告できていたことが状況の打開につながった。母親は「この子は嘘をつかない、信じています」と思いを語られた。子どもと一緒に懇談参加で、母親にも幼児期からの育児の積み重ねに自信をもっていただくことができたと感じた。発達外来という立場で仕事をしていても、本人の苦しさにリアルタイムに気づいてあげられないことも多い。数年経ってから、以下のような語りをしてくれた子どももいた。

～「しんどいと思ってはいけない」と自分に言い聞かせてがんばっているうちに、無理しすぎていることに気づかず、ついに学校に行けなくなった(精神的疲労で不登校になった中学時代の振り返り)

～「しゃべろうと思った時、相手が何を言ってくるかを先に考えてしまい話せなかった」(場面緘黙の小学時代)

の振り返り) etc. 子どもたちには、振り返り、自己開示の中で自己理解を深めていく経験が重要である。自己開示の力は幼児期から育むことが大切であり、そのためには「伝わった喜び」を生活の中で体験させていく意識が必要である。

3 発達軸に立ち返る、子どもはひたすら精一杯生きている

小学4年生ころより、成長の中で、周りと自分との関係がよく見えるようになり、過剰刺激にさらされ自己評価が下がりやすくなる。みなと同じようにできること、普通のようにみえることが重視される学校生活の中、発達障害のある子どもの精神的疲労は強い。二次的な精神の不調や、家からお金の持ち出しなどの行動の問題をおこすこともある。ここに幼児期からの切れ目のないフォローの意義がある。その子なりに精一杯に適応行動を取ろうとして問題が起きることも多い。発達障害の特性の視点も併せもった応援を通して自己肯定感の維持が配慮されている。早期対応、予防ができるのである。前思春期からはともすると親御さんも知らず知らずに子どもに負担をかけがちである。「子どもはひたすら精一杯生きている (高橋 脩)」ということばを大人は感じ入りたい。

4 自律の力も幼児期からしっかり育む

自分の気持ちをコントロールする力を育むためには、親が子どもをリードするかたちで、事前の合意をとりながら生活づくりをすることが大切である。例) 買い物「おかしは一個だけでがんばろう」

5 特性としての理解

「自分は発達障害なのか？」と診断基準を手に持ち問うてきた小学生にとまどったことがある。診断名や障害に目が向きすぎると欠点探しになりやすい。自己肯定感を育むためには「いいところ探し」の視点が重要である。特性は欠点にも長所にもなり得る。例えば、ある母親は、診察での「パターンに入りやすい」という話をうけ、毎日幼稚園に行く前に親子で一緒に10分間ドリルをやるパターンをつくり応じて下さった。結果一年以上続けることができた。子どもと親御さんが一緒に、持ち味として生きる特性を達成感もち体験する意義は大きい。

6 自閉症スペクトラムの脳の情報処理特性(石川道子より)

- ① 視覚優位 (話し言葉が苦手目で覚える) ⇒言葉で言われると分かりにくい etc.
- ② 細かくパーツで捉える ⇒独特の非言語コミュニケーション、表情がわかりにくい etc.
- ③ 2つ以上の情報処理が難しい ⇒複数の人の動きを追えない etc.
- ④ パターンが決まった物事の方が受け入れやすい ⇒こだわりが強い、限定された興味遊び etc.
- ⑤ 記憶力がよい ⇒写真的記憶、レコーダー的記憶、道順・位置・順番にこだわる etc.
- ⑥ 感覚過敏性 ⇒周囲の刺激への反応が激しい、苦手な刺激がある etc.
- ⑦ パニックを起こしやすい ⇒心の中にかかる気持ちの変化をコントロールしにくい etc.

7 自己肯定感周囲の肯定的理解で育まれる

子どもと親にとり、園が家庭以外で安心を保障される居場所となる必要がある。ペースは違っても、保育者やクラスメートに個性が認められ安心できる集団生活をすごしてほしい。発達障害特性の視点ももちながら行動を理解し、読み解き、思いに耳を傾けながら子どもの育ちを支えたい。また、支援の必要な子どもたち一人ひとりをしっかり受け止める、ぐらつかない保育者の姿勢を定型発達の子どものたちもしっかり見ている。こうしてつくられるクラスの風土を、学校、そして将来のやさしい地域づくりへとつなげていきたい。

(参考)

北部地域療育センターだより

第3号「自閉症スペクトラムの早期発見と支援」 高橋 脩 講演録

第8号「思春期・青年期の発達障害」 岡田 俊 講演録

「精一杯」説 こころの科学 No.162 / 3-2012 p100-101 高橋 脩 日本評論社

「そうだったのか！発達障害の世界ー子どもの育ちを支えるヒント」 石川 道子 中央法規

第12回 名古屋市地域療育センター合同研修会

❖ 遊び—その子らしさをつくりだす土台～「自然と遊ぶ」を中心に～❖

講師：高田短期大学

河崎 道夫 特任教授

日時：平成27年9月2日(水)

場所：名古屋市西文化小劇場

参加者：地域療育センター、児童発達支援事業所、
保育所、幼稚園職員 256名



1 「遊ぶこと」「楽しいことに熱中すること」は

自分らしく生きていく主人公としての土台、自分らしさを創り上げていく土台、である。

その子の可能性は計り知れない…⇒「標準化された発達像」からの脱却を。

「発達」をかけがえのないその子の「物語」として見る視点が重要。

2 とても長い歴史の中で、子どもの遊び世界が豊かに伝承され、蓄積されてきた。

⇒残念なことにそれが今の子どもたちに手渡されていない！！

深刻な歴史的変動、とりわけ「自然との格闘的な遊びの衰退」

1960年頃から子どもの時間・空間・友達が激変、異年齢子ども集団の崩壊

⇒「遊びは買って手に入れるもの」という感覚の蔓延 ⇒商品世界から抜け出そう！

例：泥だんごキット、道の駅にカブトムシ、買った商品（おもちゃ）は大人から結果と規制を与えられる

3 たくさんの楽しい遊び世界を子どもに「手渡す」、子どもとともに創り出す

- 自然とやりとりする遊び……木の実笛、草笛、数珠玉、その他無限にあるはず
雑草「カタバミ」の遊び方（実演）……かざぐるま、かたばみすもう、10円磨き
- なければ植えて「自然」を増やそう……数珠、むくろじ、くぬぎ、ブラックベリー、その他実のなる木
- 技の達成を楽しむ遊び
- 対立を楽しむ遊び……いないいないばあ、まてまて遊び、オオカミさん、
鬼ごっこ、かくれんぼ、じんとり、かんけり…
- ごっこ遊び……物と場との格闘で豊かさを生む
屋外や自然の多様さを土台として、描画遊び、家づくり
- 探検遊び……「あの山にはきつと…」身体と想像力が躍動する。

4 憧れは遊びの原動力

- 「世界を全身で感じ取る」、「心が深く揺り動かされる」、そんな遊びが子どもの体に染み渡っていった時、生涯の土台となる世界の原風景がきっと根付く！！

河崎講師著作紹介 『ごっこ遊び—自然・自我・保育実践—』 2015年ひとなる書房

*** ボランティア募集中 ***

センターでは保育活動のお手伝いをしていただける保育ボランティアを募集しています。

- ◎保育活動のお手伝い(室内の活動や、園外への散歩など一緒に活動します)
- ◎センター行事のお手伝い(運動会、夏まつりなど)
- ◎通園児の弟妹の保育
- ◎教材作りや環境整備など

短期間、短時間でもかまいません。現在、学生さんから主婦の方まで活躍中です。

TEL (052) 522-5277 までお気軽にお問い合わせ下さい。

通園体験・療育グループ体験

通園体験・療育グループ体験は、北部地域療育センター担当区域内の保育園や幼稚園の先生方に療育センターで行なっている療育を体験して理解を深めてもらう取り組みとして、平成21年度より開始し、平成25年度より障害児通所支援事業所（未就学児）の職員の方にも対象を広げました。

今年度の参加実績は保育園・幼稚園の先生方の通園体験が3回で9名、療育グループ体験が7回で11名、児童発達支援事業所の通園体験が4回で11名でした。体験参加者の感想をご紹介します。28年度も今年度と同時期に実施予定ですので、是非ご参加下さい。

グループ体験者の声(1)

職員の方の子どもや保護者の方に対する接し方や関わり方、とても優しく穏やかに関わっている姿が多く、話し方等もとても参考になりました。また保育園でも実践していきたいと思います。

グループ体験者の声(2)

とても貴重な時間を過ごせてよかったです。訓練や検査のようなことばかりしていると思っていましたが、短い時間の中でも皆で生活をし、いろいろな経験を重ねていることもわかりました。

グループ体験者の声(3)

普段、園では保護者の方とどう遊んでいるか等しっかり見ることはないので、短時間でも一緒に玩具で遊ぶ姿、ふざけた時の声のかけ方等を見ることができて良かったです。

通園体験者の声(1)

一対一で向き合うことの大切さを改めて感じました。一日の流れを数字や写真で見せたりする所も保育園と違う所で、参考にさせて頂きたいと思えます。

通園体験者の声(2)

先生方の声掛けがとてもやさしく、否定的な言葉は使わず子どもが失敗してしまった事でも「〇〇しちゃったね」と肯定し保育士が認めてあげたり、子どもがお支度をするときにも「子どもが主体的に」という援助の仕方が沢山あり、改めてそこが大切なのだと痛感させられました。

事業所

通園体験者の声(1)

普段は一対一の個別で療育をしていますので、集団の中で生活する子どもたちの姿を見て、良い面でも悪い面でも子どもたちはまわりの子どもの姿・行動を見ながら関わりあって生活しているのだと改めて感じました。

事業所

通園体験者の声(2)

自由遊び、朝の会、課題遊びと、日課に沿って行われている中で子どもたちが楽しく過ごしている姿が微笑ましく思いました。夫々の個性や特性を捉えた遊びだったり適した声掛けはとても勉強になりました。

回数

年度	21	22	23	24	25	26	27	計
幼保通園体験	3	4	4	5	3	4	3	26
幼保グループ体験	7	8	6	5	9	8	7	50
事業所通園体験					4	2	4	10
計	10	12	10	10	16	14	14	86

人数

年度	21	22	23	24	25	26	27	計
幼保通園体験	10	12	7	15	5	10	9	68
幼保グループ体験	15	20	12	14	16	15	11	103
事業所通園体験					9	4	11	24
計	25	32	19	29	30	29	31	195

名古屋市北部地域療育センターだより 第10号

発行日 2016年3月1日

編集・発行 名古屋市北部地域療育センター
〒451-0083

名古屋市西区新福寺町2丁目6番地の5

TEL (052) 522-5277

FAX (052) 522-5279

